

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

第五福竜丸展示館を訪れたのは十月、展示館の外のコスモスが、きれいな花を揺らしていた。
私は熊本を本拠とする地方紙・熊本日日新聞の東京支社で、兼務の論説委員として社説を担当している。第五福竜丸のことは熊本にいたころから一度訪ねてみたいと思っており、機会があれば紹介したいと考えていた。
館の方の案内で展示館を見て回ったが、初めて見た第五福竜丸に驚かされたのはその大きさであった。二十世紀が終わりを迎えようとしている今、「核の世紀」という言葉は今世紀を象徴する言葉の一つであろう。最初、その物理的の大きさに驚かされたが、実はその「大きさ」は、存在そのものの大きさという側面も持っていた。
熊本時代、社会部勤務が長く、被爆者の取材も数多く行ってきた。長崎と有明海を挟んで位置する熊本県は被爆者も多い。私が取材した人たちのなかでも、広島、長崎で二度被爆した人、被爆後に帰った古里で水俣病になった

こだわりたい「小さな」視点

高峰 武

人、被爆者で炭鉱災害のCD中毒になった人などがいた。
そのころからずっと頭を離れなかったのは、民族には民族特有の体験があり、広島、長崎、第五福竜丸と続く「被爆体験」は、日本人にとっては「民族としての体験」なのかもしれないということであった。一人一人の深い悲しみと怒りは、世界の被爆者たちと通底するものがある。普遍性を持つ民族の体験。しかしこの体験は一方で、自覚的に刻み込み、伝え続けるという覚悟した作業も必要としているようにも思う。
そして今、私たちに一番求められているのがその自覚的な作業である。「風化」という言葉を、展示館の方からも聞いた。この言葉は、私が長年取材している水俣病問題にも共通することである。
来年はビキニ環礁での水爆実験から四十年。水俣病も公式発見から三年後には四十年になる。水俣でも語られているのは、やはり「風化」という問題

である。本質的なことは何一つ、「解決」してはいないにもかかわらず、である。
例えば今、地方分権論議が盛んである。それは当然のことだと思ふ。ただ、異論があるのは、これまで中央集権で効果を上げてきたが、ここに至り限界にきたとする見方に対してである。地方を犠牲にすることでの「発展」ではなかったのか。水俣病についても、高度成長の犠牲になった、という。しかし、実態は、水俣病をはじめとする公害があったことではじめて、高度成長が達成できたのではないか。私たちは、いろんな問題にほおかわりすることで、「多数者の利益」を生み出してきたのではないか。「多数者の利益」が本場に「みんなの利益」だったのか。改めて問い直す時期だと思ふ。
足尾銅毒事件から水俣病と続く歴史を中心にあげれば、日本の近代は随分、違った像を結ぶ。核と被爆者の問題もそうだ。第五福竜丸を中心にみれば、日本の戦後のありようは、禍々しい姿になるように思ふ。
地方紙の記者として、「小さな」視点を中心にした報道にこだわりたいと思っている。
(熊本日日新聞東京支社)



「さわっても大丈夫かな……」小学校の社会科見学

切絵の第五福竜丸を寄贈
潮風が冷たい展示館前広場。十月に移植した「すずさんのバラ」が刈り込んだ枝の間から次々に新しい芽をだして、ほっとした十一月中旬から、今年も展示館には小中学校の社会科見学が続きました。昨年よりはすこし少ないとはいえず十一月一三〇校余、十二月も一日から三日の間に三十一校と、平和学習の子どもたちであふれんばかりでした。
岩手県柴波郡矢巾中学校二年生は全員の作文集を、同野田郡野田中学校二年生は折り鶴を持参し、船を前に四部合唱を響かせ、盛岡市の乙部中学校二年生は、事前学習と文化祭での研究発表の成果を

持って来館。文化祭では「文明の光と影」のテーマの一つとして、ゴミの島に捨てられた第五福竜丸をとりあげ、絵本「わすれないで」をお手本に作成したという模造紙二枚大の切絵の「廃船」を展示館に寄贈しました。
また、北海道富良野高校三年生三二五人、山口県豊北高校二年生一六三人の修学旅行、「広島への旅」を計画する市川市第八中学校二年生三〇〇名が終日班ごとの自由見学を行なうなど多彩でした。
東京三鷹市の婦人の学習グループ、社会教育近代史セミナーの見学会も行なわれ、セミナー主宰の米田佐代子山梨女子短大教授の案内でたくさんの婦人が熱心に見学しました。

和歌山から博物館員の研修
十一月十四日、和歌山市立博物館学芸員の竹内善信さんが来館、ビキニ事件40周年から広島・長崎被爆50周年への「展示企画」について交流しました。勝浦港はじめ放射能まぐるの調査状況、被災船の実態と被災の全容など、市民生活とのかかわりを、新しい視点でとりあげたいと展示館への協力が要請されました。

ビキニ事件40周年記念シンポジウムの開催へ——協会評議員会開く
十一月二十四日、東京神田の学士会館で、協会の評議員会が開かれ、ビキニ事件40周年の記念行事について討議しました。
評議員会には、理事・監事・顧問を含め二十三名が出席、新しく評議員に就任した鈴木沙雄、山田英一、山村茂雄の各氏も出席し抱負を語りました。
40周年記念行事として、記念シンポジウムや、第五福竜丸展示館での記念写真展の開催、資料集の発行などが話し合われました。
評議員会に先立つ理事会やシンポジウムの相談会で決定され、当日の討議で具体化された記念シンポジウムの内容はつぎのとおり。年内にアピールや開催要綱を発表することになりました。
ビキニ事件40周年記念シンポジウム

「ビキニ事件40周年と平和」
*日時 一九九四年二月十九日 (土) 午後一時半～六時
*場所 学士会館三〇二号室
*プログラム
・主催者挨拶
・記念講演
・豊田 利幸氏
・パネル討論(パネリスト予定) 岩垂 弘、田中里子、藤田秀雄、前田哲男、山田英一、服部 学(司会)

の各氏。
・懇親会(午後六時～八時)
*会費 千円(懇親会参加者三千円)
また、シンポジウムの意義については、ラッセル・アインシュタイン宣言につながるビキニ事件の全人類史的意義を確認し、第五福竜丸の存在意義と平和協会の独自性を明白に打ち出す。核軍備競争の残したつめあとに焦点をあて、被害者の立場にたち乗組員、太平洋島民の40年を追ひ、現状と今後について考える。新しい世代に平和意識を着実に育み行動へ発展させるために第五福竜丸展示館のなすべきことを考察し、その経験から平和教育への教訓を引き出す。などが強調されました。第五福竜丸乗組員、被災船調査活動の報告も予定されています。

連載・フォーラムアウトと土壌学の出会い 3
深刻化する土壌汚染と対応

川瀬 金次郎

今まで土壌汚染の現状を述べたが、一方で私共は汚染除去資材の探索も推進し、⁹⁰Srには大谷石粉末、セメントダスト、石灰質資材、苦土質資材、有機質資材、¹³⁷Csには大谷石粉末、セメントダスト、珪酸質資材が有効であることを実証した。

さて新潟大学に在職当時、東京電力の柏崎刈羽原子力発電所1号機が一九八五年九月十八日に運転を開始した。その一年前から新潟県は原発周辺の環境監視評価会議(議長は知事)を設置し、公害研究所、水産試験場、東京電力が測定した環境放射線の監視、いわゆるモニタリングを開始した。新潟大学の医、理、工、農の放射能研究グループは学識経験者として委員に任命された。行政、業者に大学を加えたトロイカ方式は新潟方式と呼ばれ、注目を浴びた。

これより先、ビキニ核実験直後から15年におよび各分野別プロジェクト研究が活用された。すなわち一九七〇年から県当局は、新潟県原子力技術委員会(委員長は川瀬

担当)を発足させ、その企画と指導で柏崎、刈羽の原子力発電所建設予定地の微地形の生態系を対象に環境放射能の事前調査を実施した。公害研究所、水産試験場が実務を担当、大気、浮遊じん、陸水、陸土、農畜産物、海底土などを対象とした。

ところで柏崎原発の運転開始の翌年一九八六年四月二十六日ソ連ウクライナ共和国キエフの北130kmのチェルノブイリ原子力発電所4号炉が暴走し、大爆発した。「最悪事故」炉心が溶融し、超特大活字の大見出し(朝日4月30日)が全世界を驚かせた。

ちょうど32年前のビキニ被災、第五福竜丸事件と放射能雨のマスコミ騒動を想起した人が多かったと思う。4月末から5月にかけての¹³⁷Cs降下量の全国分布は東北南部、北陸、関東、東海にかけてレベルが高く、4mCi/m²以上、以前から日本海側の降下量が高いとの指摘を裏書きしていた(注:「放射線科学」29、p177(一九八六年))。コリヤキン教授(ソ連エネルギー

研究所)いわく「最大の被害は土壌汚染で、使えなくなった農地すなわち1ha当り5Ci以上の土地が300万ha、この事故で失われた生産基盤の総額は50兆円と推定され、ソ連の国家予算の4割に相当する」。「白ロシアでは過去4年間兵士が土壌汚染の除去を行ったが、今は止めている。理由は効果がないと判ったから(注:朝日「汚染大地」p174-199)」。39年前のビキニ事件直後の武谷三男氏(注:「原水爆実験」p128-1957)の「⁹⁰Srは雨や塵で降って土地にしみこみ、地表から5-8cmの土が吸着し、これより深所に達していない」の楽観と全く相反する深刻な事態を呈するにいたった。

さて昨年11月採取した柏崎原発周辺地区の陸土の¹³⁷Csは刈羽村高町57Bq/kg、同村勝山62Bq/kg(注:1Bqベクレルは1秒間に1個の放射線を出す強さである)。この事実もともと降下した時は同じ濃度であったのが年月の経過と共に下層へ90%近くも移行するという深刻な逆転現象を示したものである。そこで土壌層位別に少くも深度1mまでのデータによる検討が必要となった。

さて汚染農地の浄化方法としては、i)作物への吸収、ii)表層土の除去、iii)深耕と下層への溶脱による深層への移行、iv)肥料と土壌改良剤の施用、v)深根性作物の浅根性への転換をあげている。しかし現実には、汚染土壌から作物への経根吸収を完全に防ぐことは殆ど不可能であり、土壌の放射能汚染を除去するには100年以上かかると予想する人がいる。

ところで国際世論の強い反対にもかかわらず、中国が10月5日に新疆ウイグル自治区で39回目の核実験をした。米国の92回よりも少なく、地下核実験としても、「死の灰」を恐れる日本人には許しがたい暴挙と抗議したい。現在地球規模に拡大した土壌の放射能汚染は絶対に防止しなければならぬ。去る10月13日の日ロ首脳会談の経済宣言で提示したロシアの原子力発電所の安全性確保のための日本の積極的な技術協力を実現すべきである。さらに人類地層環境におけるフォーラムアウトの行動に関する基礎的研究の一層の推進を期待したい。(新潟大学名誉教授・農学博士)

△▽▽

展示館ができるまでの福竜丸

青木 佳子

「第五福竜丸が夢の島にある」と聞いてその近くに勤務していた私は、放課後自転車に乗って行って見ました。

一九六七年のことです。その頃の夢の島は、蠅の大群が発生して、大さわぎになったり、とにかく汚い、東京のゴミ捨て場になっている埋め立て地でした。そのゴミの山の向こうに、はげかいたオンボロの木造船が横たわっているような感じで、朽ち果てて打ち捨てられていました。

「これがあの福竜丸……」何故か涙があふれそうになりました。船腹には「はやぶさ丸」と書いてありました。

一九五四年三月十六日の読売新聞に大きく報じられ、日本中が原爆マグロで大きさわぎとなった「ビキニ事件」。死の灰をあびた第五福竜丸の乗組員は、二十三人全員が、「急性放射能症」と診断され入院、九月二十三日には久保山愛吉さんがかえらぬ人となりました。

ビキニ事件をきっかけに原水爆禁止の声は全国に広がり、十二月までに集まった署名は二千万を越え、翌一九五五年八月には、第一回原水爆禁止世界大会が開かれました。

しかし、そのきっかけをつくった第五福竜丸は、人々の目の前から姿をかくし、いつか忘れられてしまっていました。後にわかったことは、意図的に国民の目を福竜丸からそらせたのです。政府は、事件から三カ月もたたない五月二十四日、当時としては破格の価格(二百万円)で文部省が第五福竜丸を買い上げ、東京へ持ってきていたのです。その後水産大学の練習船として使用されていたのが、被災から十三年たって廃船となつて人々の前に姿を現わしたのです。

いち早く気づいた都職労港灣分会の人々や、地元江東の人々、平和を愛する人々の「何とかこの福竜丸をこのまま埋めてしまわずに、保存できないものか」という声

おこってきました。一九六八年三月十日の朝日新聞「声」欄に「沈めてよいか第五福竜丸」という投書がのったことで、全国に波紋が広がり、保存の気運がたかまり、募金なども行われるようになりました。私も仲間といっしょにずいぶんいろいろなところへカンパを訴えに行きました。駅頭はもちろん、深川八幡や、御不動さまの縁日、祭り、人の集まる場所、どこへでもかけて行きました。

福竜丸もゴミの山から移動して水に浮いている状態になりました。中に入ってみると、船底には泥水がたまり、破損がひどいと感じる状態でした。あらしの後はみんなど行って船底にたまった水をバケツリレーでかいだしたりしました。地元の大工さんで今は故人となられた島田敏之助さんは「心配で、毎日見に行っているよ」と言っていました。

広島に原爆ドームがあるように、この東京の夢の島に第五福竜丸を保存しようと、さまざまな立場の人々が立ちあがりました。

「第五福竜丸を見る集い」「第五福竜丸を美しくするつどい」などいろいろな催しも行ない、江東

平和委員会では、バッチを作ったり、写真を売って募金をしたり、さまざまな工夫をして運動しました。フランスがムルロア環礁で核実験をしたと聞くと、「福竜丸と一緒に核実験に抗議しよう」と福竜丸の前にテントを張って一晩中坐りこみをしたりしたこともありました。

一九六九年には保存委員会もできました。もちろん、保存委員会ができたからといって、まだまだいろいろ困難な問題は多くありましたが、一九七二年四月の都知事選挙で、保存運動の推進を公約していた美濃部亮吉氏が再選したことでも大きく前進し、沈没寸前だった第五福竜丸も、七月には船体の応急排水工事が行なわれるなど、永久保存に向けて工事が行なわれていきました。七六年の展示館設立までにはさまざまな困難な問題があったのを、多くの人々の努力で何とか克服し、現在の第五福竜丸展示館ができました。今も、たくさんの小・中・高校生などが創意ある見学会を開いていると聞いて、とても嬉しく思っています。(中学校教諭)